

中世文学未刊資料の研究

佐藤 高

佐藤 高明 著

中世文学未刊資料の研究

ひたく書房

【著 者 略 歴】

大正13年 徳島県に生れる
 昭和28年 東京文理科大学国文学科卒業
 昭和38年 国立阿南工業高等専門学校助教授
 昭和42年 同校教授に昇任
 昭和43年 文部省教科書調査官
 昭和52年 文部省主任教科書調査官に昇格
 昭和56年 文学博士〔筑波大学〕
 昭和57年 現在、文部省主任教科書調査官として勤務中

【著 書】

- *『阿讃語文庫国文学翻刻 双書』（全12集）—昭和40年度文部省科学研究費補助金（各個研究）の交付による。
- *『後撰和歌集の研究』（日本学術振興会刊）—昭和44年度文部省科学研究費補助金〔研究成果刊行費〕の交付による。
- *『片仮名本増鏡の研究』（風間書房刊）—昭和50年度文部省科学研究費補助金〔研究成果刊行費〕の交付による。
- *『真寸鏡—桂宮本—』（勉誠社刊・昭和55年）
- *『御物本増鏡』（勉誠社刊・昭和56年）
- *その他、国文学、国語教育に関する論文、紀要等多数。

昭和 57 年 2 月 20 日 印刷
 昭和 57 年 2 月 28 日 発行

中世文学未刊資料の研究 ©

定価一五〇〇〇円

著 者 佐 藤 高 明

発 行 者 井 上 了 貞

印 刷 者 田 中 忠 男

発 行 所

ひ た く 書 房

〒144 東京都大田区南蒲田二一八一五

電話〇三—七三八—一五九三番

振替東京〇—八七三四七番

緒言

国文学の研究には、何よりも信頼できる本文を用いることが重要である。そのためには作者の自筆本を用いることがもっとも理想的であるが、国文学——とりわけ古典文学の世界では、それは到底望み得べくもない現状にある。というのは、古典文学の作品の多くは原作者の自筆本が失われていて、われわれの眼に触れるのは、自筆本を書写した転写本のみが存在するというのが実状だからである。それとても自筆本にごく近い年代の転写本が残っているならばまだしも、中には自筆本から幾世紀も距てて転々書写された不純な本文によるしか方法のない場合すらある。

そこでわれわれは、現在に伝え残された転写本、つまり伝本を一本でも多く博搜してその本文を調べ、でき得る限り原作者の自筆本の本文に近い状態に復元し、よりすぐれた正統な本文を用いて研究をする必要がある。その一つの作業として各地に存在する公私の書庫に秘蔵されている、いまだ世に知られざる伝本の発掘や調査という仕事は、ここに重大な意義をもつに至るのである。そういう意味では、現在調査が進められている冷泉家の文化遺産の数々は、まさに世紀の大事業というべきであらう。

今回、本書が公刊することとしたのは、旧阿波藩主蜂須賀家に所蔵されていた「阿波国文庫」の写本群である。阿波国文庫はもと蜂須賀家の徳島本邸に三万余冊あり、別に東京別邸にもほぼそれに近い数の蔵書があつて、両者を合わせると実に六万冊になんとする一大コレクションであつた。それはまさに旧加賀藩の尊経閣文庫にも匹敵する貴重な古典の宝庫であつた。その中には学界未見の貴重な資料をはじめ、世界に一つしかないといわれた国宝級のものを含め、由緒正しい本文を有する善本を数多蔵していたことは、夙に学界周知の事実である。しかるに不幸な今

次大戦の結果、その多くが烏有に帰し、残余のものもまた止むを得ざる仕儀によって四散した。そして現在、徳島県立図書館に所蔵されているのは、僅かに四百六十余冊の寥々たる有様であつて、隆盛を誇った往時の面影は全くみられない。

しかし現存する数少ない蔵書の中にもこれを丹念に調査すると、国文学研究上、逸することのできない数々の貴重な資料の含まれていることが判明した。その中には、例えば、屋代弘賢の不忍文庫旧蔵の一本でもある天下の孤本『拾遺集私抄』や、筆者がさきに公刊した片仮名本『増鏡』の一伝本たる『源起記』の如き、学界未見の新資料も存在したことは、筆者の大きなよこびであつた。

そこでこのたび、これらの中から右に挙げた未翻刻の『拾遺集私抄』をはじめ、いま一本の新資料たる『家長日記』、並びに『土御門内相府通親卿記』『文亀三年卅六番歌合』などの諸作品に加え、筆者架蔵のものもあわせて紹介することとした。

なお、本研究は、昭和五十六年度文部省科学研究費補助金研究成果刊行費の交付に基づく公刊であることを一言附記する次第である。

昭和五十七年一月

佐藤 高明

一帯 春戀

阿波國文庫

石勝

石大旨

言れにかまふ涙もあはれ
あはれ神もむとわまつ

右

後歌女

あはれもあはれ月そわたり

あはれ月の神もあはれに

あはれあはれ雲のうらもあはれ

あはれあはれ雲のうらもあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

『下冷泉為豊 七十五番恋歌合』(筆者所蔵)の冒頭本文。
別名『水無瀬殿恋歌合』とも。



天下の孤本『拾遺集私抄』上巻の表紙。
下巻も同体裁。現在、徳島県立図書館蔵。



いま一本の阿波国文庫本『家長日記』の冒頭本文。
これまでの研究書に全くとりあげられていない新資料。

阿波国
文庫
21

戊午中夏遂書功令一校畢庚寅也

加朱書了

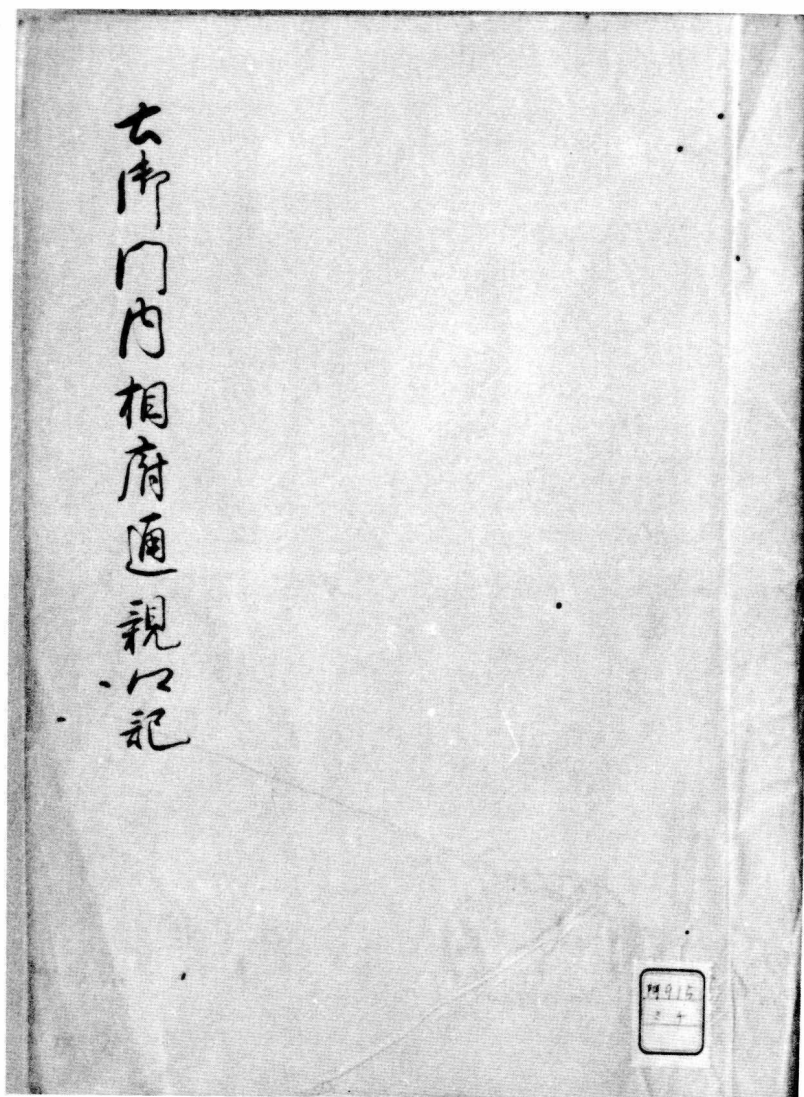
源貞憶

あれなる事のつづつたる事はいそつとあり

6/4

『家長日記』の奥書.

従来の阿波国文庫本(後藤重郎氏御所蔵)には奥書はない.



『土御門内相府通親卿記』の表紙。
『家長日記』と全く同体裁であるが、筆蹟は異なる。

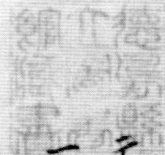
土御門内相府通親記

阿波國文庫

土御門内相府通親記
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、
十一、
十二、
十三、
十四、
十五、
十六、
十七、
十八、
十九、
二十、
二十一、
二十二、
二十三、
二十四、
二十五、
二十六、
二十七、
二十八、
二十九、
三十、
三十一、
三十二、
三十三、
三十四、
三十五、
三十六、
三十七、
三十八、
三十九、
四十、
四十一、
四十二、
四十三、
四十四、
四十五、
四十六、
四十七、
四十八、
四十九、
五十、
五十一、
五十二、
五十三、
五十四、
五十五、
五十六、
五十七、
五十八、
五十九、
六十、
六十一、
六十二、
六十三、
六十四、
六十五、
六十六、
六十七、
六十八、
六十九、
七十、
七十一、
七十二、
七十三、
七十四、
七十五、
七十六、
七十七、
七十八、
七十九、
八十、
八十一、
八十二、
八十三、
八十四、
八十五、
八十六、
八十七、
八十八、
八十九、
九十、
九十一、
九十二、
九十三、
九十四、
九十五、
九十六、
九十七、
九十八、
九十九、
一百、
一百一、
一百二、
一百三、
一百四、
一百五、
一百六、
一百七、
一百八、
一百九、
二百、
二百一、
二百二、
二百三、
二百四、
二百五、
二百六、
二百七、
二百八、
二百九、
三百、
三百一、
三百二、
三百三、
三百四、
三百五、
三百六、
三百七、
三百八、
三百九、
四百、
四百一、
四百二、
四百三、
四百四、
四百五、
四百六、
四百七、
四百八、
四百九、
五百、
五百一、
五百二、
五百三、
五百四、
五百五、
五百六、
五百七、
五百八、
五百九、
六百、
六百一、
六百二、
六百三、
六百四、
六百五、
六百六、
六百七、
六百八、
六百九、
七百、
七百一、
七百二、
七百三、
七百四、
七百五、
七百六、
七百七、
七百八、
七百九、
八百、
八百一、
八百二、
八百三、
八百四、
八百五、
八百六、
八百七、
八百八、
八百九、
九百、
九百一、
九百二、
九百三、
九百四、
九百五、
九百六、
九百七、
九百八、
九百九、
一千、
一千一、
一千二、
一千三、
一千四、
一千五、
一千六、
一千七、
一千八、
一千九、
二千、
二千一、
二千二、
二千三、
二千四、
二千五、
二千六、
二千七、
二千八、
二千九、
三千、
三千一、
三千二、
三千三、
三千四、
三千五、
三千六、
三千七、
三千八、
三千九、
四千、
四千一、
四千二、
四千三、
四千四、
四千五、
四千六、
四千七、
四千八、
四千九、
五千、
五千一、
五千二、
五千三、
五千四、
五千五、
五千六、
五千七、
五千八、
五千九、
六千、
六千一、
六千二、
六千三、
六千四、
六千五、
六千六、
六千七、
六千八、
六千九、
七千、
七千一、
七千二、
七千三、
七千四、
七千五、
七千六、
七千七、
七千八、
七千九、
八千、
八千一、
八千二、
八千三、
八千四、
八千五、
八千六、
八千七、
八千八、
八千九、
九千、
九千一、
九千二、
九千三、
九千四、
九千五、
九千六、
九千七、
九千八、
九千九、
一万、
一万一、
一万二、
一万三、
一万四、
一万五、
一万六、
一万七、
一万八、
一万九、
二万、
二万一、
二万二、
二万三、
二万四、
二万五、
二万六、
二万七、
二万八、
二万九、
三万、
三万一、
三万二、
三万三、
三万四、
三万五、
三万六、
三万七、
三万八、
三万九、
四万、
四万一、
四万二、
四万三、
四万四、
四万五、
四万六、
四万七、
四万八、
四万九、
五万、
五万一、
五万二、
五万三、
五万四、
五万五、
五万六、
五万七、
五万八、
五万九、
六万、
六万一、
六万二、
六万三、
六万四、
六万五、
六万六、
六万七、
六万八、
六万九、
七万、
七万一、
七万二、
七万三、
七万四、
七万五、
七万六、
七万七、
七万八、
七万九、
八万、
八万一、
八万二、
八万三、
八万四、
八万五、
八万六、
八万七、
八万八、
八万九、
九万、
九万一、
九万二、
九万三、
九万四、
九万五、
九万六、
九万七、
九万八、
九万九、
十万、
十一万、
十二万、
十三万、
十四万、
十五万、
十六万、
十七万、
十八万、
十九万、
二十万、
二十一万、
二十二万、
二十三万、
二十四万、
二十五万、
二十六万、
二十七万、
二十八万、
二十九万、
三十万、
三十一万、
三十二万、
三十三万、
三十四万、
三十五万、
三十六万、
三十七万、
三十八万、
三十九万、
四十万、
四十一万、
四十二万、
四十三万、
四十四万、
四十五万、
四十六万、
四十七万、
四十八万、
四十九万、
五十万、
五十一万、
五十二万、
五十三万、
五十四万、
五十五万、
五十六万、
五十七万、
五十八万、
五十九万、
六十万、
六十一万、
六十二万、
六十三万、
六十四万、
六十五万、
六十六万、
六十七万、
六十八万、
六十九万、
七十万、
七十一万、
七十二万、
七十三万、
七十四万、
七十五万、
七十六万、
七十七万、
七十八万、
七十九万、
八十万、
八十一万、
八十二万、
八十三万、
八十四万、
八十五万、
八十六万、
八十七万、
八十八万、
八十九万、
九十万、
九十一万、
九十二万、
九十三万、
九十四万、
九十五万、
九十六万、
九十七万、
九十八万、
九十九万、
一百万

『土御門内相府通親卿記』の冒頭本文。

『家長日記』と共に、現在、徳島県立図書館蔵。



文龜三年歌合

一番 樹蔭裏月

左

女房

輝る聲きこえし庭のあまの葉色は月より光

右

式部卿親王

あやめを室へし月と影の同く月をいふはむかし

左歌 聴解聲 於垣樹 寂時雨之在枝頭 見

月散於垣林 誤秋色之入葉 廂具詞 妖艶而

其心喜 深者少 右哥 短宵 早明 僅望 殘月

之掛林梢 風鈴 雖異他 餘情 難及 左者哉



19481

『文龜三年三十六番歌合』の冒頭本文。
表紙の題簽には『文龜三年卅六番歌合』とある。

目次

口絵写真

緒言

第一部 本文翻刻篇

凡例

拾遺集私抄阿波国文庫旧蔵
不忍文庫旧蔵
徳島県立図書館蔵.....五

家長日記阿波国文庫旧蔵
徳島県立図書館蔵.....六九

土御門内相府通親卿記阿波国文庫旧蔵
徳島県立図書館蔵.....一二三

遠嶋百首和歌森敬介旧蔵
徳島県立図書館蔵.....一六三

下冷泉為豊七十五番恋歌合阿波国文庫旧蔵
筆者架蔵.....一八一

文亀三年卅六番歌合阿波国文庫旧蔵
徳島県立図書館蔵.....二一九

第二部 研究・解説篇

第一章 拾遺集私抄について.....二四五

第二章 拾遺和歌集成立考.....三九五

第三章	いま一本の阿波国文庫本家長日記	四三五
第四章	土御門内相府通親卿記の出現	四八九
第五章	『遠嶋百首和歌』と『家長日記』との関係について	五五一
第六章	下冷泉為豊七十五番恋歌合の成立について	五八五
第七章	文亀三年三十六番歌合について	六四五
索引	和歌初句索引	
	人名・書名・重要語句索引	
あとがき		

第一部

本文翻刻篇

凡 例

一、本書は現在徳島県立図書館に所蔵されている阿波国文庫旧蔵本、並びに森敬介旧蔵本と、筆者架蔵の阿波国文庫旧蔵本とを忠実に翻刻したものである。

翻刻にあたっては出来得る限り原典通りを旨とした。そのため、次の諸点に意を用いた。

原典における漢字は一部を除き原典通りの字体とし、あえて常用漢字字体に統一したりはしなかった。例えば、原典のある個所に「聲」「忝」「邊」とあり、別な個所で「声」「松」「辺」とあればその通りとし、これをあえて「聲」「忝」「邊」に、また「声」「松」「辺」などの字体に統一したりすることは避けた。

一、原典における明らかな誤写、誤字もこれを私において改めずにそのままとし、判読困難な個所と共に本文中に*印を附し、且つ()を施してその中に諸本の本文を示して参考に供した。

一、翻刻文には濁点は附さなかった。しかし読者の便を考えて句読点は附した。但し、句読点については次の方法によった。即ち原典には書写者または校訂者の附したと思われる句読点にかわる朱点が付されているので、本書の句読点も大体それに従うこととした。

一、原典の本文にある傍注形式による朱の書き込みについては、本書においては(朱)として翻刻した。

一、原典における見せ消ちは*印を附し、()内に「衍字」と注記して示したが、*印をしなかった場合もある。

一、「く」などの反復記号は原典通りとしたが、漢字については「々」を用いたところもある。

一、読みやすいように、本文を適宜に段落に区分した。